

けいれんが起きたら

「けいれん」と聞いても、あまりなじみのない人も多いかもしれませんが、子どもは脳が未熟なために起しやすく、だいたい子どもの100人中7~8人がけいれんを起こすとされるほどです。決して珍しいことではないことを、知っておいてください。

けいれんのパターンは、全身または体の一部(目、口、足、手)を硬くして突っ張る、ガクガクさせる、意識をなくして呼びかけに反応しない、白目をむく、顔色や唇が真っ青になるなど、様々です。初めて見る人は驚きますが、熱性けいれんや憤怒けいれん(泣き入りひきつけ)などは、数分でおさまる場合がほとんどなので、慌てず、できるだけ落ち着いて行動しましょう。

熱性けいれんの場合、多くは6歳くらいまでに起こらなくなり、後遺症も残らない場合が多いのですが、他にも原因となる病気があるので、一度病院で診てもらいましょう。

ご注意ください！



けいれんが起きた時は…

けいれんが起きたら次の事に注意して様子を見て、おさまってから受診しましょう。5分以上おさまらなかったり、5分も待てない時は、すぐにでも救急車を呼びましょう。

応急処置

- 周りに危険なものがない、平らな場所に寝かせる
- 吐いた物が喉につまらないよう、体と顔を横向きにする
- 衣服や首回りをゆるめる

NG処置

- 舌をかまさないようにと、口の中にハンカチなどを入れる
- ↓喉が詰まったり、介助者が指をかまれたりする
- 体を揺すったり、大声で呼びかけで刺激する



次の場合は、すみやかに救急外来を受診しましょう。

- 初めてのけいれん
- 1歳未満、特に1ヶ月未満の赤ちゃん
- けいれん後も意識の戻りが悪い
- 長いけいれん(15分以上)
- けいれんの起こり方に左右差がある
- けいれんを繰り返す
- 何回も吐く
- 頭を打った後のけいれん
- けいれん後もぐったりしている、機嫌が悪い、ミルクを飲まない
- 熱があがって24時間以上たつてからのけいれん など

観察しておきましょう

けいれんが起きたとしても、救急外来に行った時にはおさまっていることも多いものです。できるだけ、けいれんが起きている時の様子(持続時間や体の様子など)、けいれんがおさまった後の様子(顔色や機嫌など)を観察し、医師に伝えるようにしましょう。